Hospital News

shirousagi

しろうさぎ

島根大学
SHIMANE UNIVERSITY
2013.7.1
vol.33

特別インタビュー

椎名 浩昭教授／安本 博晃准教授（泌尿器科）
谷戸 正樹講師（眼科）
鈴宮 淳司教授（腫瘍センター/腫瘍・血液内科）
磯部 威教授／津端 由佳里助教（呼吸器・化学療法内科）
北垣 一教授（放射線科）

INDEX

特別インタビュー

特別インタビュー1　泌尿器科……4
特別インタビュー2　眼科……5
特別インタビュー3　腫瘍センター/腫瘍・血液内科……6
特別インタビュー4　呼吸器・化学療法内科……7
特別インタビュー5　放射線科……8

各科紹介

将来の指導医候補生の紹介　～平成25年度初期臨床研修医の面々～ ……10
モンゴル健康科学大学との交流……11
脳神経外科でのITB療法について……12
しまね医療情報ネットワーク「まめネット」への参加について……13
島根大学医学部附属病院 再開発完成記念式典を行いました ……14
「看護の日」の催し（看護の日のイベント）……15
「身障者ドライバー専用駐車場」と「思いやり駐車場」……16
平成25年度病院医学教育研究助成 ……17
魅力ある職場づくりを進めています……18
音楽でできるボランティア……19
就任挨拶　検査部……20
就任挨拶　放射線部……21
就任挨拶　リハビリテーション部……22
就任挨拶　栄養治療室……23
プライバシーマーク更新審査を受審しました

島根大学病院の最新医療

特別インタビュー

島根大学病院の最新医療 泌尿器科

不可能を可能にするロボット手術。大切なのは、最先端のチームワーク。

椎名 浩昭教授／安本 博晃准教授

医療の高度化が進む現代。なかでも注目されている先進医療のひとつがロボット手術です。島根大学附属病院では、昨年11月19日より手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」を用いた前立腺全摘除術を開始しました。現在、週1回のペースで同手術を行っており、経過も極めて良好です。ロボット手術と言っても、ロボットが勝手に手術するわけではなく、操作するのは人間です。とは言え、医師一人でできるものではありません。医師や看護師、臨床工学技士たちそれぞれのスペシャリストがチームをつくって行っています。ダ・ヴィンチの大きなメリットは、手術の様子がモニターに映るのでとても見えやすいということです。従来の方法では、手術をしている場所が非常に見えにくく、ごくわずかな人間にしか見えない状況で手術が進んでいきます。しかし、ダ・ヴィンチの場合、今何をしているのかがよく見えています。たとえば、現在医師4人で行っていて8つの目で画面を見ているので、いろいろ気づく部分がある。よく見えるということは、手術がより安定して進むということなのです。

もうひとつの大きな特長は、人が手で手術を行うよりも、とても精密なことができること。従来の方法ではできなかった細やかな手術が可能になります。実際の人間が1cm程度動かすところを、ロボットだとミリ単位で動いてくれます。なので、前立腺全摘除術で言えば、傷が小さい、出血量が少ない、尿禁制あるいは勃起機能など神経機能への影響が少ない、確実な尿道膀胱吻合が可能、術後の回復の早いなどのメリットが挙げられます。

しかし、前述したように、ロボットが勝手に手術を行うわけではなく、人間が扱うものなので、知識はもちろんのこと機器操作の修得も大切です。実際に私たちもダ・ヴィンチ導入後、自主トレーニングを何度も重ねました。また、看護師たちとともにシミュレーションも行いました。操作に慣れ、感覚をつかむのはやはりある程度時間がかかるものです。また、頑張っているのは医師だけではありません。チームのみんなが連携して初めて成立する手術。機械だけが最先端ではなく、チームワークが最先端でなくてはならないと思います。

(左)安本 博晃准教授 (右)椎名 浩昭教授

ダ・ヴィンチチーム写真

治療法がないと言われ続けた難治性緑内障に希望の光を。

谷戸 正樹講師

日本で失明になる原因の第一位は何だと思いますか。それは、緑内障です。日本人で言えば、失明する人の5人に1人が緑内障。特に高齢者の方だと2人に1です。目の中には、目と脳をつなぐ視神経があります。目に入ってきた光が網膜で受け取られ、視神経を通って脳に伝わりモノが見える仕組みになっていますが、緑内障というのは、視神経が徐々に萎縮してくる病気のこと。現在、再生医療がもてはやされていますが、萎縮してしまった視神経を元に戻すという方法は今のところありません。つまり、緑内障を完全に治療することは現在の医学ではできないのです。しかしながら、緑内障の進行を遅らせるように予防することはできます。緑内障という病気は、眼圧を低く保つと視神経の萎縮が遅くなるという特徴があります。人間には寿命がありますから、寿命の間モノが見えるように、眼圧を下げて視神経の萎縮を遅らせるという方法が、現在のところ緑内障の最も効果的な治療なのです。

緑内障の眼圧を下げる手術として一般的なのは、「トラベクレクトミー」という手術です。しかし、「トラベクレクトミー」は、効くこともあれば、効かないこともあります。眼圧が一度下がったけど、また上がってくるケースもしばしまあります。そういった「トラベクレクトミー」が効かない患者さんに対して、効果が期待できる手術が「チューブシャント手術」です。これは、医療器具を目に移植する手術で、何回も目の手術を行ってきた患者さんに効果的であると言われています。しかし、問題はこの移植に用いる器具が海外ではずいぶん昔から認可され使われてきたにもかかわらず、日本ではずっと認可されなかったのです。海外では「チューブシャント手術」を行って助かるはずが、日本では助からないという状況が、長い間続いていました。

「チューブシャント手術」は2012年4月にようやく日本でも保険診療が始まりましたが、一般的に解禁されてもなお、まだまだ少ないのが実状です。島根大学医学部附属病院では、2008年から全国の大学病院に先駆けてチューブシャント手術を行っており、手術件数はもうすぐ100例になります。高齢になるにつれて増えてくる病気だけに、これからも治療や研究、指導を重ねていくことで地域医療ひいては医学の進歩に貢献していきたいですね。

谷戸 正樹講師

緑内障チューブシャント手術のすべて目次

島根大学病院の最新医療 ―― 腫瘍センター/腫瘍・血液内科

チーム医療の充実度。それが、医療の質を高める。

鈴宮 淳司教授

腫瘍センター/腫瘍・血液内科では、肉腫、血液がん、原発不明がんなどさまざまがん腫の患者さんの診療を行っています。各種がんの診断はもちろん、治療に関するセカンドオピニオンの提供、またはがん専門相談員による患者さんやご家族への相談支援を受け入れるなど業務は多岐にわたります。そこで大切になるのは、チーム医療の充実度です。医師をはじめ、看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士など、さまざまな医療スタッフがそれぞれの専門を活かし、綿密に連携を図りながら、患者さんに対しどれだけ質の高い医療を提供できるかがカギになります。それには、日々患者さんの状態を把握し、毎日ディスカッションを重ねなくてはなりません。また、病院だけでなく、患者さんが自宅に帰った後も、具合が悪くなったら連絡を受けることもあるし、決して医師ひとりの力では成り立たないのが、医療現場だと思います。

私にとって腫瘍センターとは、単純にがんの診療を行うためだけのものではなく、地域と病院をつなぐ、がんの相談センターであると考えます。「治るなら治りたい」「苦しむことなく治りたい」「どうせなら安い医療費で治りたい」という患者さんの要請にどこまで応えられるか。そういう相談や支援をできる場所としての役割を果たしていかなくてはならないと思います。島根大学医学部附属病院には、がん患者さんおよびそのご家族が気軽に立ち寄り、療養上の悩みや情報交換ができる「ほっとサロン」を5年前に開設しています。島根県内には、今現在、「ほっとサロン」のようながんサロンが20カ所以上も存在します。ただ、島根県という地域において、がんの先進医療を誰もが満足に受けられるという体制を確立するのはまだ時間がかかるかもしれません。しかし、チームの力や地域の協力によってそれを補い、提供する医療の質を高めていくことが大切だと考えます。

外来化学療法室リクライニングシートの点滴治療

朝のミーティング

鈴宮 淳司教授

すべての地域に先進医療を。今求められる医療の“均てん化”。

礒部 威教授／津端 由佳里助教

医療の“均てん化”という言葉をご存知でしょうか。平たく言えば、誰もがどこにいても質の高い医療を受けられるということ。例えば東京であろうが、島根であろうが、同じレベルの医療技術を提供できることは当たり前でなくてはならないのです。とりわけ今求められているのが、がん医療における均てん化です。特に島根県においては、圧倒的に医師が不足しており、100km圏内に医師が何人いるかというレベル。島根県の中でも、松江や出雲には大学病院や総合病院が集まっていますが、益田や大田、江津などの地域には拠点病院がないのが実状です。しかも、島根県の大きな問題して交通の便がまだまだ発達しておらず、例えば邑南町の患者さんが拠点病院に行こうと思ったら、車でも公共交通機関でも数時間かかってしまいます。今や国民病とも言えるがんの医療環境としては、あり得ない現実だと思います。そこで、昨年、がん診療にも地域医療に組み込んでいくために設立したのが、「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」という文科省のプロジェクトが交付され、島根大学もそのグループの一員として参加しています。ここでの目的は、がんに関わる専門医を育てること、そして、医師だけではなくて医療関連全般におけるプロフェッショナルを養成していくことです。がん医療には、それぞれが高度に専門化した手術、化学、放射線の各療法のほか、緩和ケア、精神腫瘍学に基づくこころのケアなど集学的アプローチ、チーム医療が求められます。そうしたなかで、山陰全域でがん治療のレベルアップを図っていこうと今頑張っています。

もちろん、拠点病院が少ない地域ゆえの難しさはあります。しかし、それを言い訳せず、医師を含めた個々の医療スタッフが常に向上心を持ってスキルを磨ける環境づくりが大切です。そこで、このプロジェクトの一環として、大学と医療機関が密接にコミュニケーションをとれるテレビ会議システムを開発しました。このシステムは、島根県内のほとんどの病院に導入される予定になっています。情報の共有化は、医療の均てん化の大きな一歩。この一歩を足がかりに、先進医療をすべての地域に提供できるような体制を構築していきたいと考えています。

（左）津端 由佳里助教 （右）礒部 威教授

島根大学病院の最新医療 放射線科

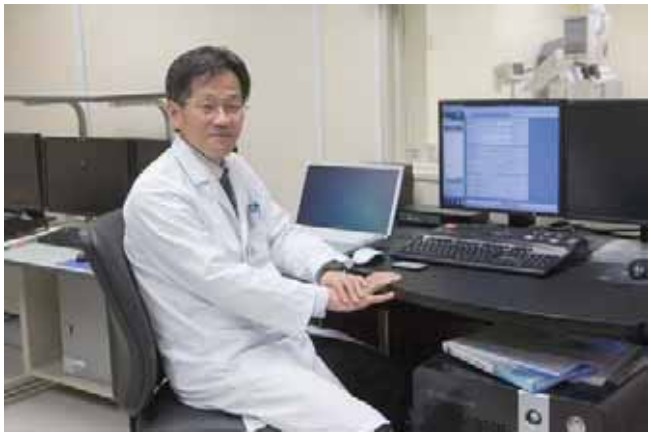
短時間でより鮮明な画像を提供。放射線診断は新たなるステージへ。

北垣 一教授

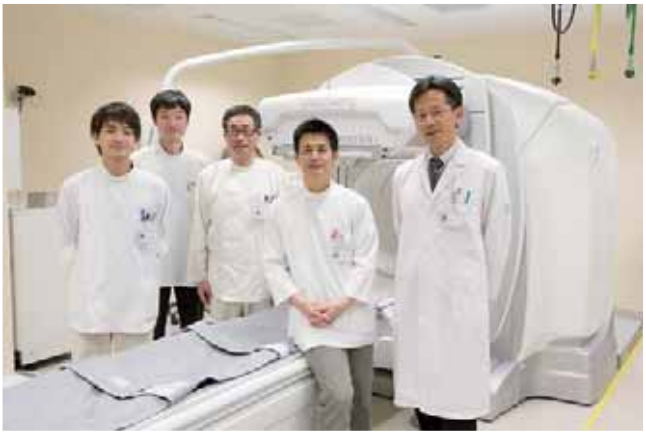
放射線診断の良さは、患者さんは楽に検査を受けることができて、主治医は多くの情報が得られること、さらに主治医だけでなく患者さんやその家族も目で確認してその情報を共有できることです。放射線診断には形態を精密に画像化するCT，MRIと、心臓や脳など重要な臓器の血流代謝といった機能を画像化する核医学診断があります。この核医学診断において今年度新たに画期的な装置が島根大学医学部附属病院に導入されました。それが山陰では初、国内でも7台目の「半導体検出器」です。これまで半世紀の間使用されてきたヨウ化ナトリウムの結晶を用いたアンガータイプのガンマカメラに比べ、半導体検出器は感度が高く、短時間での撮影が可能。したがって、短い時間でコントラストがくっきりとした鮮明な画像が得られるようになりました。今回導入されたものは心臓専用で、コンパクトかつ短時間で検査できることから、患者さんへの圧迫感や心臓への負担も軽減されます。今後は心臓だけでなく全身用においても核医学検査の発展が期待されています。

また、今回同時に、核医学検査にCTによる形態情報を加えることで、正確な位置情報を得られる機器も導入。患者さんが診断の説明を受けたとき、よりわかりやすい画像を用いることによって安心感が生まれ、医師の話をしっかりと理解しながら聞くことができるのではないかと考えます。もちろん、新しい機器の導入は、医療スタッフ同士の連携が必要不可欠。先進機器とチームワーク。その両輪が、診断の大きな支えになると確信しています。

最新の半導体検出器装置による検査



北垣 一教授



放射線部核医学検査スタッフ

Introduction

各科紹介

卒後臨床研修センター

将来の指導医候補生の紹介 ～平成25年度初期臨床研修医の面々～

卒後臨床研修センター・准教授　鬼形　和道（おにがたかずみち）

“初期臨床研修医の面々“

平成25年度は医科研修医19名と歯科研修医3名を向い入れ，2年次研修医22名と合わせて44名の指導医候補生がセンターに所属しています．1年次研修を関連施設で開始する方々もおり，学内の初期研修医は28名です．大学2年間研修の方が12名、関連病院とのたすきコースの方が12名、小児科重点コースの方が2名、そして外科重点と総合医育成特別コースの方が各1名です．オリエンテーション終了後の写真を掲載しましたが、皆の笑顔の質が上がっているのが窺えます．

“センターのコンセプト”

私たちスタッフは，皆さんを管理するマネージャーではなく，皆さんが前傾姿勢を持って研修に臨めるように支援するサポーターです．3つのコンセプトを示します．

Hospitality　Flexibility　Responsibility

“人を育てるのは人”

地域の皆さんに良質の医療を提供できる“魅力ある研修医”の育成には，人間性豊かな指導医が必須です．研修医が“魅力ある指導医”に育つよう，そして彼らのスキルアップを支援する指導医が前傾姿勢を保てるよう応援しています．

“センターのFacebookが誕生!”

本年度の初期臨床研医の誕生に合わせて，当センターのFBが誕生しました．私たちの研修センターをもっともっと知ってほしいという気持ちと，研修医や学生のみなさん，そして多くの人々の意見を募りたいという思いでスタートしました．当センターの企画するセミナーや講演会だけでなく，研修医の皆さんの表情や声，そして研修医を支えるサポーターの“つぶやき”を学内外へ発信したします．先輩から後輩へのメッセージ，そして後輩から先輩へのエールを待っています．

“センターの課題”

「環境整備（救急医療分野・CPC）」「安全管理体制（インシデントレポート）」「研修プログラム（SBOsの明示）」「研修評価（EPOC入力の迅速化）」「医療行為のチェック（診療録確認）」について，多くの部署の皆様には改めてご協力をお願い申し上げます．私たちの病院の研修プログラムを選択してくれた研修医の皆さんを病院職員全員で支援してゆきましょう．島根の医療を担い，後輩を育てる指導医を育成することが私たちの使命のひとつであると信じています．

歯科口腔外科

モンゴル健康科学大学との交流

歯科口腔外科・教授　関根　浄治

本年4月2日，モンゴル健康科学大学から客員教授の称号をいただきました。証書は，同月25日にボロルチメグー等書記官（駐日モンゴル大使館）から,本学医学部長室で直接手渡されました。

私とモンゴルとの関わりは，昨年9月にウランバートルで開催された第10回アジア予防歯科学会の国際会議に,記念講演の演者として招聘されたことがきっかけです。私は，口腔病変の予防について，口腔外科医の立場から，口腔がんの予防と早期発見，さらに治療法について講演したところ，モンゴル国立がんセンター頭頸科の先生方から，口腔がん患者さんの治療方針に関する多数の質問を受けました。モンゴルには，ロシア式の医療が強く根付いており，口腔がんを含めた歯科・口腔外科疾患の診断と治療には，われわれのやり方とは大きなギャップを感じました。

モンゴル健康科学大学には，医学部と歯学部があります。歯学部附属病院は，つい数年前に開設されたばかりで，口腔がんの治療は，国立がんセンター頭頸科で，口腔外科医と耳鼻科医が連携をとって行われています。私のミッションは，このような状況のなかで，いわばアドバイザー的な役割を果たすことだと認識しています。

称号授与後の5月12日には，再びモンゴルから招聘を受け，国立がんセンタースタッフと関連施設で学ぶ口腔外科レジデントのみなさん，さらに健康科学大学の学生さんを対象に，口腔がんの治療とインプラントによる口腔機能回復法についての講演と症例カンファランスを行いました。

モンゴル健康科学大学歯学部附属病院には，当科関連施設院長の恒松克己先生（出雲市ご開業）が名誉教授を務める特診室があります。今回は，恒松名誉教授によるモンゴルの子供たちの口腔検診にも参加することができました。

今回の訪問は，駐日モンゴル大使を通して企画されたため，モンゴル政府環境省や人口発達社会福祉省を表敬訪問し，今後の口腔の健康維持への取り組みについて議論しました。

最終日に訪問した日本大使館では，特命大使と一等書記官らからモンゴルの医療の現況を伺いました。また，日本の出資でウランバートル市に建設予定の総合医療センターへの顎顔面口腔外科外科設置を陳情しました。

今回の一連の事業にご助言とお力添えをいただきました坪田 正氏に深謝いたします。

国立がんセンター頭頸科のみなさんと
右から2番目がヘンティー診療科長（口腔外科医）。

恒松克己名誉教授による口腔検診
検診の様子は，モンゴル国営放送で放映されました。

脳神経外科

脳神経外科でのITB療法について。

脳神経外科・准教授　永井　秀政

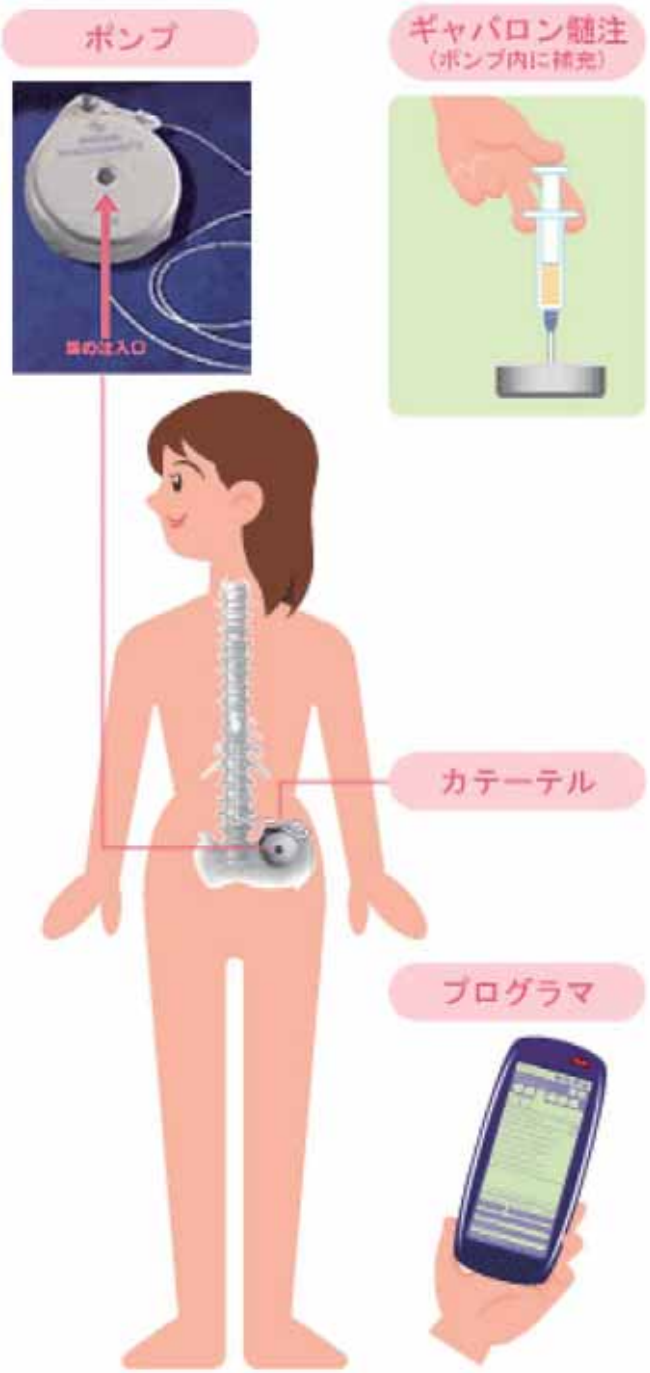
バクロフェン髄注内投与療法（Intrathecal Baclofen：ITB療法）は、バクロフェンという薬を脊髄周囲に直接投与することで既存治療では効果不十分な痙性麻痺に対して、痙縮を和らげる治療法です。薬の投与量を加減することで痙縮をコントロールし、痙縮によるつらい症状の改善をはかります。痙縮の緩和により日常生活を改善し、生活しやすくします。

痙縮というのは、筋肉が異常に緊張して自分の意思で動かしにくくなり、わずかな刺激で勝手に手足が動いたり、曲がったり、引っ込んだり、突っ張ったりします。そのために足がもつれて締め付け感や痛みを伴うこともあります。

痙縮が起こりやすい代表的な疾患として、脳卒中、頭部外傷、低酸素脳症、急性脳症、脊髄小脳変性症、多発性硬化症、脊髄損傷などがあります。このような疾患で下肢や上肢の麻痺で痙縮がある場合に、日常生活で困っている場合にITB療法の適応となります。

この治療ではあらかじめ、手術により体内に植え込んだポンプからカテーテルを通して作用部位である脊髄に直接薬剤を投与します。そして2～3ヶ月毎に、外来でポンプ内へ薬剤を補充してやることで、効果を持続させます。

実際に治療の対象となるかどうかは、ポンプを植え込む前にスクリーニングテストで効果を判定してから決めることが可能です。もし判断に迷う場合には脳神経外科の外来に相談してみてください。



医療情報部・地域医療連携センター

しまね医療情報ネットワーク「まめネット」への参加について

医療情報部・地域医療連携センター　花田　英輔

島根県は、地域医療再生基金を活用して県内の医療機関間を結ぶ「しまね医療情報ネットワーク」(愛称「まめネット」)を構築し、NPO法人に委託して昨年末から運用を開始しました。このネットワークは医療機関同士を結び、同意を得た患者さんの情報(診療記録等)の共有を主な目的とします。情報の参照は患者さんが提供あるいは参照を同意した医療機関内でIDを発行されたユーザのみが可能です。患者さん自身が直接にまめネットに接続することはできません。

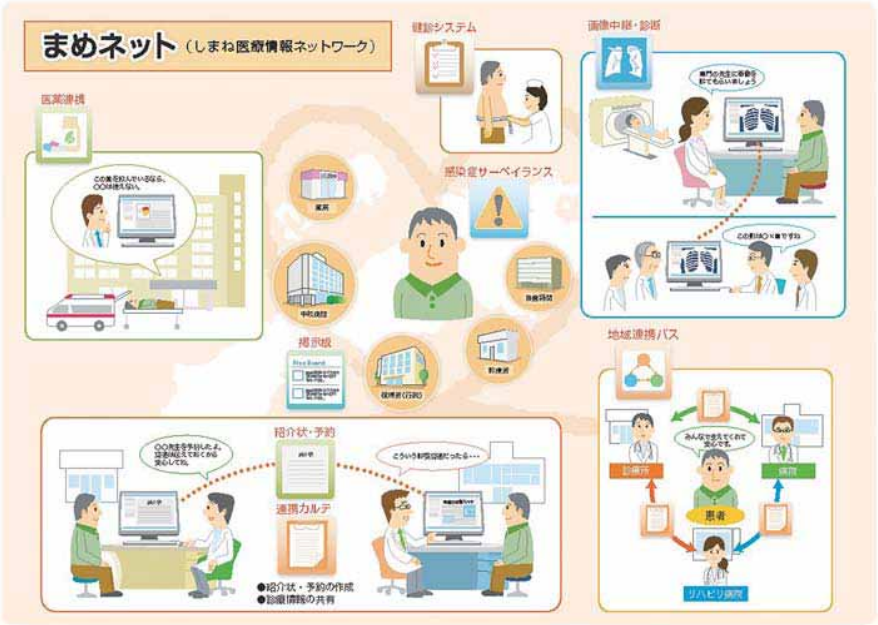
当初は県立中央病院だけであった情報提供病院も、5月に情報提供を開始した隠岐病院をはじめ、県内の主な中核病院に拡がる予定です。

本院は特定機能病院として、また地域唯一の大学病院として、このネットワークに参加して県内各医療機関との患者情報の共有を図ることとしました。本院ではまめネットが持つサービスのうち、診療情報共有サービス、紹介状サービス連携、画像中継サービス、ファイル共有サービス、地域医療連携パス共有サービスの利用を検討中です。

本院が持つ紹介状システムとまめネットが持つ紹介状システムとの間における連携機能は既にできあがっており、現在は当院の患者さんの情報を地域医療機関に提供する機能、及び他院からまめネットを通して送られる画像情報の取り込み機能を作成しています。9月に情報提供を開始することを目標としています。

本院職員に対するID発行手続きおよび患者さんの同意を得る手続きも整いつつあります。本院から各医療機関への情報提供が始まると、他の参加医療機関の情報の参照も可能になります。患者紹介時やフォローアップ時の情報参照などの利用が期待されます。

「まめネット」カード　同意した患者さんはこのカードを1人1枚持ちます



「まめネット」の機能概念（しまね医療情報ネットワーク協会ホームページより）

総務課

島根大学医学部附属病院 再開発完成記念式典を行いました

総務課

6月1日(土), 本学医学部附属病院において病院再開発完成記念式典を行いました。この式典は、平成20年度の新病棟着工に始まり, 今年3月の既存病棟および外来・中央診療棟改修完了に至るまでの5年にわたる病院再開発事業を終えたことを記念したものです。

式典には, 島根県選出の国会議員をはじめ文部科学省, 島根県, 出雲市, 大田市, 関連病院, 自治協会, 企業各関係者など約120名が出席されました。

初めに本学井川病院長から, 続いて小林学長からそれぞれ挨拶があり, 島根県の拠点病院として地域医療の向上に活かしたいなど, 本院の果たす役割について今後の抱負を述べました。

引き続き, 文部科学省大臣官房文教施設企画部長坂技術参事官, 竹下衆議院議員, 青木参議院議員, 小林島根県副知事(溝口島根県知事の祝辞を代読)からそれぞれ祝辞があり, 病院再開発完了によりさらなる本院への期待の言葉をいただきました。

その後, 小林学長, 井川病院長, 大谷医学部長および来賓代表者によるテープカットが行われ, 本院の新たな門出を祝いました。

また, 井川病院長より病院の施設概要についてパワーポイントを用いた説明が行われたのちに, クリニカルスキルアップセンター, 小児センター病棟, 緩和ケア病棟, 手術ロボット ダ・ヴィンチ, ICU・救命救急センター病棟, 救命救急センターをめぐる病院見学会を行いました。

最後に本院食堂ラパンにおいて祝賀会を開催し, 盛大な式典を締めくくりました。

井川病院長の挨拶

小林学長の挨拶

テープカットで本院の新たな門出を祝う

病院見学の様子(ｸﾘﾆｶﾙｽｷﾙｱｯﾌﾟｾﾝﾀｰ内)

食堂ラパンでの祝賀会

看護部

「看護の日」の催し（看護の日のイベント）

看護部　副看護部長　日原　千恵

5月12日はフローレンス・ナイチンゲールの誕生日で、1990年に「看護の日」として制定されました。5月12日～18日を「看護週間」とし、「看護の心をみんなの心に」のテーマのもと、気軽に看護にふれていただけるように、当院では5月13日に「看護の日イベント」を催しました。

昼の部は、在宅ケア指導室(看護専門外来)にて認定看護師による「血圧測定と血糖測定」を行い、43名の方に生活習慣についてアドバイスを行いました。「おむつのあて方・床ずれの予防」は8名の方に体験して頂きました。また看護師の研修や学習を行う「人形モデルを使った看護教育現場の見学会」も開催しました。

夜の部は「看護師による小さな音楽会」として、ミニコンサートを開催しました。日頃、看護師として業務していますので十分な練習はできていませんが、「こいのぼり」「花は咲く」などピアノ・フルート・ハンドベル等の演奏・合唱等を披露しました。ハンドベルの演奏には医師の参加もあり、会場の患者さんや教職員の方と一緒に、音楽にふれ合うひと時を過ごして頂きました。

昼の部：「血圧測定・血糖測定」から生活習慣のアドバイス
「おむつのあて方・床ずれ予防」の体験

昼の部：看護師の研修、学習を行う「人形モデルを使う看護教育施設」の見学会

夜の部：看護師による小さな音楽会

財務部
施設企画課

「身障者ドライバー専用駐車場」と「思いやり駐車場」

財務部施設企画課（出雲）サブリーダー　石川　俊行

従来から強い要望のありました「病院玄関近くの身障者用駐車場」が3月に新設されました。スペースが限られていたこともあり、2台分の設置となりましたので「身障者ドライバー専用駐車場」として運用しています。これはドライバー（運転者）本人が身障者である患者の方優先であることを示しています。駐車場に空きがない場合及び付き添いの方が運転しておられる場合は立体駐車場2階「思いやり駐車場」をご利用いただいています。

立体駐車場2階「思いやり駐車場（身障者用駐車場）」は平成21年立体駐車場供用開始当初11台であったものに、平成24年から新たに追加の9台を加え現在20台で運用しています。当初の11台分は幅も広く床面に車いすマークの表示もあるため、一般の方の利用によるトラブルはほとんどありませんでした。しかし追加で設置で設置した9台分は一般の方が多く駐車され、本来利用される患者さんやそのご家族から苦情が寄せられていました。この駐車場は幅も一般駐車場と同じ、床面の「思いやり」の文字も「見えにくい」「意味がわからない」などの理由で、一般駐車場との区別がつきにくいからだと思われました。そこで今回「思いやり駐車場」の視認性向上を目指し「大きな吊り看板の設置」「柱への表示」「床面文字の強調」を行いました。吊り看板には、利用いただける方のマークも示しています。その後、外来駐車場案内板及び立体駐車場内に「思いやり駐車場」への案内表示の追加も行いました。患者さんへの案内にお役立てください。

病院再開発事業中は駐車場不足でご迷惑をおかけしました。工事用地としていた西側駐車場の一部を駐車場として運用していますのでご利用ください。

玄関東側「身障者ドライバー専用駐車場」

「思いやり駐車場」の案内表示

立体駐車場2階「思いやり駐車場」

総務課

平成25年度病院医学教育研究助成

病院医学教育センター・センター長　廣瀬　昌博

小林祥泰学長の発案による病院医学教育研究助成が開始されてから，9年を迎えます。病院医学教育センターの業務は，新年度を迎えると同時にこの病院医学教育研究助成案件の選定が始まります。本研究助成の趣旨は，とかく病院活動は医師中心となる傾向にありますが，医療の質向上には医師ばかりでなく，病院職員の資質向上が不可欠で，職員全員に研究・研修の機会を公平に提供する，というものです。

その教育研究助成の案件が下記のように決定されました。本年度は，研究（その他を含む）35件，研修68件でした。24年度から優秀研究の成果報告会が開始され，応募件数が若干減少した印象があります。しかしながら，成果報告の義務付けは本研究助成の質を向上させるために必要であると考えています。素晴らしい研究成果を期待しています。

“平成25年度　病院医学教育研究助成採択一覧”

研究・その他部門

研　究　題　名	研究組織の名称	研究実施責任者
「あたまの健康手帳」の普及による認知症医療の効率化と地域連携の推進	認知症疾患医療センター	山口　修平
地域貢献を志向した生活習慣病（がん、呼吸器）診療ネットワークの構築と教育体制の確立	生活習慣病（がん、呼吸器）診療ネットワークワーキング	須谷　顕尚
医療職の不安・ストレスに対し早期発見・予防・具体的対策の確立を目指した検討	医療職の不安・ストレスに対し早期対応・予防を目指す多職	井上　顕
LAMP法を用いたHBV-DNAスクリーニング検査法の確立	輸血部	竹谷　健
島根県下医療安全・感染対策ネットワークの構築と質の向上に関する研究	医療安全管理室、感染対策室および病院医学教育センター	廣瀬　昌博
入院患者における栄養支援の検証	栄養サポートチーム（NST）	直良 里沙子
入院患者の栄養状態と予後の検証	栄養サポートチーム（NST）	角 亜沙子
クリニカルパス標準アウトカムマスタよるクリニカルパス精度向上について	クリニカルパス委員会	石橋　豊
島根大学病院での医師事務作業補助者（医療クラーク）業務の再検討と新たな指針作成	医療クラーク業務改革チーム	福田　誠司
高齢肺炎患者に対する抗菌薬の個別化治療に関する研究	薬剤部	石原 慎之
MALDI-TOF MS（質量分析）を用いた抗酸菌同定検査の確立	感染対策室	森山　英彦
医療過疎地に対する、より効果的な医師確保対策とは？～地方大学から全国への情報発信～	地域医療関連講座	谷口　栄作
職員の健康管理システム改善とリスクアセスメントのデータベース化	医学部附属病院安全衛生委員会	嘉数　直樹
輸血ポケットマニュアルと不規則抗体カードの作成	輸血部	竹谷　健
「島根感染対策セミナー第1回学術集会」の開催	島根感染対策セミナー	坂根　圭子
がん化学療法後の副作用に対する地域連携クリニカルパスの確立	島根がん地域連携研究会	高橋　勉
遺伝子検査の標準作業手順書の作成および拡充	検査部	松田　親史
核医学検査に係わる情報のデータベース化	核医学検査の質向上の試み	矢田　伸広
当院における医療スタッフの脳死・移植に対する意識調査	医療サービス課	米山　幸男

看護部
救命救急
センター病棟
第一ユニット

魅力ある職場づくりを進めています

看護師　渡邉　克俊

当院には、手術室やICU、救命救急センターや小児センターなど10部署で26人の男性看護師が働いています。診療科や専門領域はそれぞれ違いますが、女性が多数を占める職場において男性としての特性を活かして看護ケアを実践しています。また、当院には大規模災害時に活動するDMAT（災害派遣医療チーム）があります。専門的な訓練を受けた医師や看護師などが災害現場へ急行しトリアージや治療をおこないます。私たちも東日本大震災の医療支援活動に参加し貴重な経験をしました。

近年、男性看護師数は全国的に増加傾向でその割合は約7%です。当院においては4.7%で21人に1人程度となっています。少数派ですが、私たちは男性看護師同士の横のつながりを大切にしています。大学病院で働いていることに誇りを持ち、もっともっと魅力ある職場づくりを進めるべく、昨年10月に男性看護師会を発足しました。会発足後は、院内の活動だけでなく院外の会合にも参加し徐々に活動の場を広げています。余暇を利用した活動では、スポーツで汗を流したり医学部看護学科の男子学生とも交流したりして男性同士親睦を図る機会を持っています。年齢層も幅広くなり親子や兄弟のように先輩が新人看護師の相談にのることもあります。更衣室での会話も貴重な情報交換の場です。最近もある新人看護師が“女性の看護師さんと交代して下さい”と言われたと落胆していました。それは少なからず男性看護師が経験することです。私たちは患者さんの視点に立った医療・看護を提供しています。性別が変わっても看護の対象は不変で、その中心にいるのは患者さんです。看護を必要とする患者さんに対して、男性の視点から発揮できる創造的で温かい看護、また男性的な包容力から患者さんに安心感を与える思いやりのある看護を実践していくことが、私たち男性看護師に求められるもののひとつではないかと感じています。役割を分担し、そして男性・女性それぞれの特性を活かした患者さんを中心とする看護はとても大切なことだと思います。

いまや看護師は職業選択の男女差がなくなりつつあります。当院においても今後は更に男性看護師の増加が予想されます。26人の男性看護師がそれぞれの専門領域でスキルアップを図り、それぞれの部署で頼りにされる存在として活躍することで、病院全体が活気ある魅力的な職場になっていくものと感じています。

クリニカルスキルアップセンター　蘇生訓練室
～　高機能患者シミュレーター（HPS）　～

島根大学医学部
軽音楽部

音楽でできるボランティア

島根大学医学部医学科５年　軽音楽部　沖田　聡司

皆様は軽音楽部にどのようなイメージをお持ちでしょうか。楽器が大きな音でわんわん鳴ってうるさいとか、聞いていて疲れるとか。確かに私たちはバンドを組んでいろんな機械を使い、大きな音を出して演奏していますが、どのバンドも真剣に音楽に取り組んでいて、たかだか20分30分のライブに何時間もかけて練習を積み、自分たちのステージを作り上げています。さる5月2日、軽音楽部としてボランティアコンサートを開催させていただきました。昨年に続き、今回も軽音楽部の中でアコースティックをメインに置いたグループが出演しました。いわゆる「バンド」に一生懸命取り組んでいる人たちの中で少し変わった音楽に取り組んでいるメンバーです。変わった音楽でも気持ちは同じ。自分たちの音楽に一生懸命取り組んでいます。私もこの度5年生になり、病院実習で患者の皆様と接する機会が増え、医学生として、私たちの実習にご協力いただいている皆様に、自分たちが一生懸命取り組んでいることで少しでもお返しできればという思いがありました。楽しんでいただけたでしょうか。音楽としてはオリジナルを演奏したり、少し変わったジャンルの音楽を演奏したりしたことで、皆様にはあまり馴染みのない曲が多かったかと思います。ですが、メンバーが一生懸命に、そして楽しく演奏している様子が伝わったのではないでしょうか。自分たちが楽しくないことを他人に楽しんでもらえるとは思えません。私達は演奏を楽しむ。そして、皆様には私達の音楽を楽しんでいただく。そんなコンサートであってほしいと思っています。今回のこのボランティアコンサートで、少しでも皆様へのお返しとなっていれば幸いです。私自身の学生生活も残すところあと2年となりました。機会があれば来年も参加させていただき、皆様に楽しんでいただけたらと思っています。最後に、参加してくれたメンバー、このような機会を用意してくださった病院関係者の皆様、そしてもう一度、お越しくださった皆様に、感謝申し上げます。ありがとうございました。

検査部

就任挨拶

検査部 臨床検査技師長　三島　清司

本年4月1日より検査部臨床検査技師長を拝命いたしました三島清司（みしま　せいじ）と申します。昭和56年に本学の前身である島根医科大学医学部附属病院検査部に入職以来、主に血液検査や輸血・移植医療を中心に携って参りました。これまでの経験を活かし、附属病院職員の皆様のご協力を得ながら，この任を全うしたいと考えております。就任のご挨拶に併せ検査部の紹介をさせていただきます。

検査部では、病院の外来と入院の患者さんに実施される臨床検査を実施しています。臨床検査には血液や尿など患者さんから採取された検体を検査する検体検査と心電図や脳波、超音波、呼吸機能などのように直接患者さんに接して検査する生理機能検査があります。本院検査部ではこれらの検査を30名余りの臨床検査技師が担当しています。検査部の特徴は、全国に先駆けてコンピューターを活用した検体自動搬送システムを導入し、省力化により少人数で、広範な分野の臨床検査を効率的に院内で実施していることです。一昨年度には検査機器を高性能な最新機種に更新、また昨年度末には建物の改修工事も完了、プライバシーに配慮した採血室の設置など患者サービスの向上に努めております。

近年の医療技術の進歩は目覚ましいものがあり、臨床検査も例外ではありません。かつての検査部は、主に自動化、機械化、効率化といったハード面に主眼が置かれていましたが、今は人材育成を中心としたソフト面に力を注ぐ時代になっています。単に正確なデータを迅速に提供するだけの技術者から、患者さんにより付加価値の高い結果を提供するとともに医師の診断・治療をサポートできる医療人としてのスキルを有した臨床検査技師を育てていく必要があります。また、地域医療との連携のためにどこの施設で検査しても同じ結果が出るように臨床検査の標準化も地域の中核病院として推進しなければなりません。

疾病の多様化や重篤化に伴い，患者さんや診療科からの要望は複雑多岐に亘ってきておりますが、それらの要望に柔軟に対応し，高度先進医療と地域医療を支えていくことこそが，検査部の存在価値を高め，今後の発展に繋がるものと確信しています。

これらの問題に微力ながら真摯に努力していく所存です。今後とも皆様からの変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

プライバシーに配慮した採血室

検体自動搬送システムと分析装置

放射線部

就任挨拶

放射線部・診療放射線技師長　山本　泰司

本平成25年4月より放射線部技師長を拝命致しました山本泰司です。何卒　宜しくお願い申しお上げます。

さて、前小松明夫技師長は平成10年から15年間島根大学技師長として勤められ病院内での存在感も非常に大きなものがあり、私なんかの馬力では到底敵いません、そこで燃費勝負、ハイブリッドな放射線部運営で自分らしさを出していこうと漠然とした目標を置いています。しかし、頻繁な給油が必要で前途多難な今日この頃です。

4月からは早速、様々な会議に参加し各会の議題を見て気付いたのは、やはり地方の大学病院であり、それに則した運営を求める内容が多いことです。例えば、県内の他の医療施設との患者カルテ・画像・検査情報の共有化を図り、安全で効率的な医療を県内全域が協力し合って提供しようとする考え、これは「まめネット」という形で進んでいます。また、島根県域は東西230kmに及ぶことから各地から受診される外来患者の負担を最低減に押さえる為の効率的な検査予約、何れも放射線部が深く関わるところとなります。それらから推測すると、機器更新に於いても地域の方々に本当に必要なものは何か、周辺の病院の状況を見極めながら、また、地域の中で大学病院に求められる位置付けを考えながら戦略的に要求していくことが重要と感じました。

次に、個人的な話になりますが、小生は島根大学医学部馬術部の監督を務めています。指導を始めて25年になりますが25年前の部員を思い起こしてみると、平日は朝夕の馬房掃除と飼付、休日は朝から夕方まで草刈や乾草作り、寝藁干し、つまり授業以外の殆どを馬場で過ごす状況だったと記憶します。現在の学生はそうではなく、手分けをして時間を工夫しながら忙しく部活動を楽しんでいます。当然ながら馬を愛する気持ちと部活への思いは変わりません。要は、25年前と違い医学が進歩した分、格段に多くの学習量が必要になったということだと思います。我々診療放射線技師も同様で医療が格段に進歩していますので、時代に即した質の高い情報提供、効率的な部内運営に心掛け、皆で一丸となって地域に貢献したいと思います。

最後になりましたが、島根大学医学部附属病院教職員の皆さまからのご指導ご鞭撻をお願いしまして挨拶とさせて頂きます。

放射線部ホームページ
新人教育マニュアル、業務マニュアル、各会議報告、当直表、勉強会研修会情報など放射線部技師に関する多くの情報を掲載しています。

放射線部技師集合写真

リハビリテーション部

就任挨拶

リハビリテーション部　療法士長　江草　典政

本年3月より、岩田前療法士長の後を引き継ぎ、リハビリテーション部療法士長を拝命しました。

リハビリテーション部は開院当初、理学療法部として産声をあげました。30年余りの間に、「リハビリテーション」という専門領域が広く認知され、平成14年より、リハビリテーション部となりました。昨年秋には、病院再開発に伴いリハビリ室の床面積も1.5倍になると共に、最先端の運動療法機器や患者さんの日常生活をシミュレートする設備が導入され、ハードウェアの充実を図ることができました。

しかし、リハビリテーション部の強みはハードウェアだけではありません。リハビリテーション部はリハ医やリハ担当看護師、事務スタッフ、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）など多くの専門職で構成されていますが、患者さんを中心に互いの強みを活かし、弱点を補填する高いチーム力と患者さん想う優しさを兼ね添えています。

現在、リハビリテーション部では毎日100名以上の患者さんが、機能回復とそれぞれの職業や家庭復帰に向けて各種の療法に取り組んでいらっしゃいます。近年では、皆様にとってイメージしやすいであろう整形外科疾患や脳血管疾患の患者さんのみならず、呼吸器疾患や循環器疾患、消化器外科術後の患者さんなど、ほぼ全科の患者さんを受け入れています。

また院内の各種チーム活動として摂食や嚥下のサポート、NSTへの参加、褥瘡対策委員への参加など対応できる領域を拡大しています。そのためスタッフも上級資格の取得や各領域のスペシャリストとして日々の研鑽を続けています。

私自身も療法士長として、スタッフが力を十分に発揮することができる環境作りと、各診療科や診療支援部門の皆様の要望にお応えできる部門運営に取り組んで参る所存です。

患者さんのリハビリテーションには、皆様のご協力が不可欠であります。これからもリハビリテーション部の運営にご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

リハビリテーション部スタッフ
（リハ医3名、看護師1名、理学療法部門9名、作業療法部門5名、言語聴覚療法部門2名、事務スタッフ1名）

栄養治療室

就任挨拶

栄養治療室・室長　平井　順子

本年4月から栄養治療室の室長を拝命いたしました平井順子です。どうぞよろしくお願いいたします。

私が栄養治療室で管理栄養士として働きはじめて約1年半が過ぎました。めまぐるしく過ぎていく毎日の中で、多くのことを学び、経験させていただいています。この日々の積み重ねが「食」を通して患者さんの栄養治療につながるよう、これからも栄養士として知識や技術の研鑽に励んでいこうと思っております。

私たち栄養治療室では、「おいしく、安全な食事を提供し、患者さんの栄養状態の適切な評価、個別性を重視した栄養治療の推進」を目標にかかげ、外来・入院患者さんの病態栄養の管理と栄養治療に貢献すること、そして、地域社会との連携を重視した健康サポートに貢献することを役割と考え業務に努めています。

4月から管理栄養士・栄養士2名を加え、8人体制となりました。新人の栄養士長としては心強い限りです。また、病院の再開発にともない新厨房も完成し、最新の調理機器も導入していただきました。受託企業の管理栄養士・栄養士、調理員も含めた栄養治療室のスタッフ全員で協力し、最後まで食べることをあきらめず、可能な限り経口的な栄養摂取をめざし、患者さんに寄り添った栄養治療を進めていこうと思っております。まだまだ未熟な部分が多々ありますので、ご指導いただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

栄養治療室スタッフ

個人情報保護教育事務局

プライバシーマーク更新審査を受審しました

個人情報保護教育事務局

当院はJIS Q 15001に基づくプライバシーマークの認証を平成19年3月に受けました。プライバシーマークの有効期限は2年であり、平成21年、23年に続いて本年3月にも更新のための審査を受けました。医療情報システム開発センターから2名の審査員が来訪され、書類審査の後に院内各所をラウンドされました。

審査の結果、約20の要改善箇所が指摘されましたが、そのほとんどは規則の内容であり、ラウンドの結果、院内の個人情報保護の状況は良好との講評をいただきました。皆様のご協力に感謝いたします。今後、改正結果を付して改善点を審査機関に送り、最終の審査を受けることになります。

なお規定により、本院では年1回以上の教育の実施と、病院で働く全員の受講が義務付けられています。本年度の全体教育は7月下旬から8月初旬にかけて計5回実施の予定です。残念ながら当院でも個人情報の漏えいにつながる可能性がある事象が毎年何件か発生しています。この教育を必ず受けるよう、今から日程調整をお願いします。

プライバシーマークの維持には手間がかかり、不便さを感じる場合もあると思いますが、情報漏えい事象は病院の評価を大きく揺るがします。個人情報の確実な保護が病院と個人の信頼を高めます。今後ともご協力をお願いします。

看護師募集

インターンシップ
病院見学会へ
来てみてね!

教育指導体制が充実した環境で
自分らしくいきいきと働くことができます。

●インターンシップ ●奨学金制度 ●採用試験
について詳しくは

看護部ホームページをご覧ください。

島根大学医学部　検索

お電話でのお問い合わせ　看護部 TEL **0853-20-2478**

国立大学法人 島根大学医学部附属病院
〒693-8501 島根県出雲市塩冶町89-1　TEL.0853-20-2021・2022（総務課 人事担当）
http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/